

838
297
116

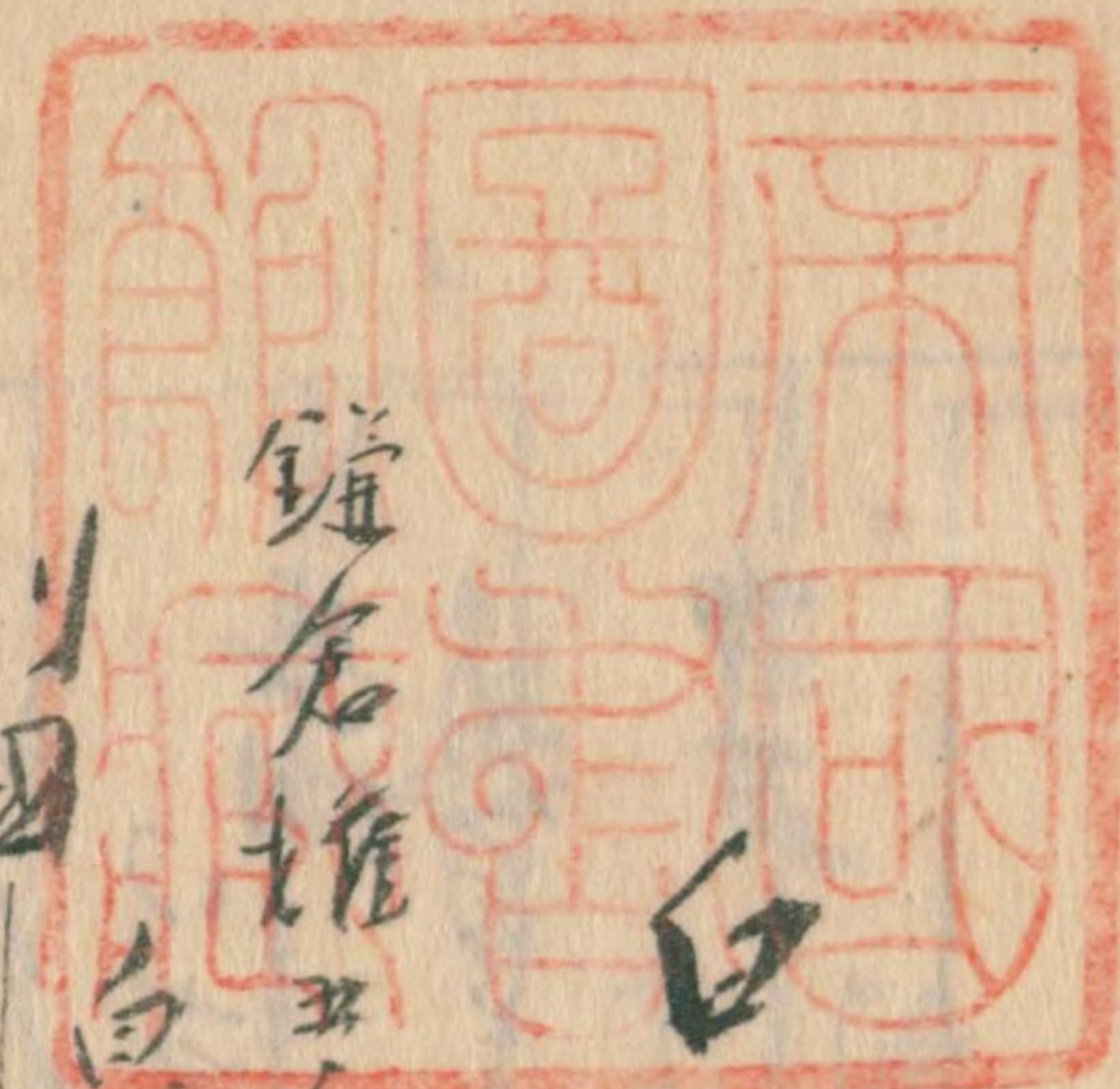
佐久間
佐藤
河津
田中
此良
廣井

月 廿四

藪 贄 恒 固
椿 井



淡路 加藤 孫三郎 孫三郎 孫三郎 孫三郎 孫三郎



白如

根岸信輔氏寄贈



鐘倉権五郎景江書據多天野景久申入庭権江景尚後汎

則國 白揚村野口 常信 國威 女子

高成 即之至 子白如

去冬再切十幅許海拾遺ア也信信会物二重ノ貴

成里 此方内 任可也

景行 与七所 五云十信紅丸

権考門 任勝叔

女子 任可也 女子 任可也



田長

田長 信房

田長 信房

田長 信房

田長 信房

大村 信房 三郎 信房 部 力 十 五 名 年

七 五 廿 年 信 房 部 力 十 五 名 年

同 年 十 月 日

成親

成親 信房 部 力 十 五 名 年

成親 信房 部 力 十 五 名 年 信房 部 力 十 五 名 年 信房 部 力 十 五 名 年

長相

長相 信房

長相 信房

長相 信房

長相 信房

長相 信房

長相 信房

長相 信房

正定

正定 信房

正定 信房

正定 信房

正定 信房

正定 信房

正定 信房

正定 信房

正定 信房

信房

信房 信房

信房 信房

信房 信房

信房 信房

信房 信房

信房 信房

信房 信房

信房 信房

信房 信房

望月内通肝

延慶元年
嘉永元年
享和元年
天保元年
文政元年
天保元年
嘉永元年
享和元年
天保元年

伊人

延慶元年
嘉永元年
享和元年
天保元年
文政元年
天保元年
嘉永元年
享和元年
天保元年

通行

中川内通肝
中川内通肝

子

清永内通肝
清永内通肝

子

九十

七方郎

清永内通肝
清永内通肝

清永内通肝
清永内通肝

内藤金房の子 中子 住尾伊左衛門

金房の子 山下権左衛門
為百足往海山 山下中房の子
持名正正方

後藤子の子 夏流部御
乃乃伊乃 夏流部御の子

藤原 兼 在國
致万子 致仙 細川致守の子 伊具授九曜正於
田中正正

兼 伊賀守

生壽港 尾城川伏見兼石以孫兼氏仕信長元龜三年兼長島一擧討死

始末綱 兼文松 陣以高 内臣卿 田中久

母之知 喜 里田善作妹

永福寺寺主兼生城州兼右
元龜二年寺主又死去 寺主九年致江落得家人 善言
去正六年以美仕中村孫平次 氏年十六入同年習學其母為持刀



上月廿日往結出共高倉山。毛利方兒田中法印守吉田共一乃為中
相能宛戰於正進進呼中村推手治手者數法印守吉田共一乃為中
合號同十二年甲申中村氏依其命為根來雜賀之柳筆用
岸和田城而秀吉乃兵房長年也然則一推儀記攻岸和田中村氏
進教之寺正進得首級有功一氏吉吉吉吉吉吉吉吉吉吉吉吉吉吉吉吉
家之河毛物危所野毛氏移母數法印守吉田共一乃為中

之度於之表及一或首級多行持
之七毫杯皆名津島高橋之氏
百少少

新出之書

同十二年五月廿九日西村氏部番一員授加後書 今在河川

以命自能之也即中吉吉吉吉吉

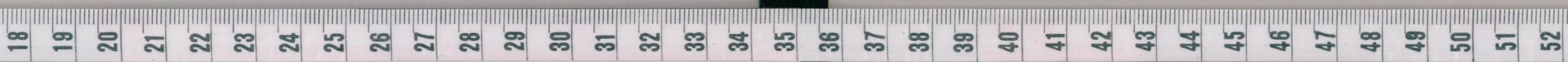
之代色之乃乃乃乃乃乃乃

壬午年三月 九月廿九日 新出之書

新出之書



同十一年甲申五月廿九日西村氏部番一員授加後書 今在河川
新出之書 壬午年三月 九月廿九日 新出之書
抄之書年大有章切也此可得為二級一氏吉吉吉吉吉吉吉吉吉吉吉吉吉吉吉吉
三千石土田日照物傳之者也抄之書不快也中村氏
唐長之書也 今在河川 今在河川 今在河川 今在河川 今在河川 今在河川 今在河川 今在河川 今在河川 今在河川
大和石曰以無憾下等之意而一氏吉吉吉吉吉吉吉吉吉吉吉吉吉吉吉吉
願是字名弱應山指揮可達身安者吉吉吉吉吉吉吉吉吉吉吉吉吉吉吉吉



大村白一呼事平有河意以誨之幸全署若其原住上法新可即也
由是甲的告一氏用中事原上河意以誨之幸全署若其原住上法新可即也
皆須發福島御引曰高軍法詳義而丁次一曰物也其大甲中先手
命亦人二宗理休亦人別世甲氏之臣三亦信也野之是秋每武田大
可也一傳由是甲的告一氏用中事原上河意以誨之幸全署若其原住上法新可即也
以在事法一之秋一之詳者義一之臣三亦信也野之是秋每武田大
改一亦事也若信也一之臣三亦信也野之是秋每武田大
其原住上法新可即也
大村白一呼事平有河意以誨之幸全署若其原住上法新可即也
由是甲的告一氏用中事原上河意以誨之幸全署若其原住上法新可即也
皆須發福島御引曰高軍法詳義而丁次一曰物也其大甲中先手
命亦人二宗理休亦人別世甲氏之臣三亦信也野之是秋每武田大
可也一傳由是甲的告一氏用中事原上河意以誨之幸全署若其原住上法新可即也
以在事法一之秋一之詳者義一之臣三亦信也野之是秋每武田大
改一亦事也若信也一之臣三亦信也野之是秋每武田大
其原住上法新可即也

大村白一呼事平有河意以誨之幸全署若其原住上法新可即也
由是甲的告一氏用中事原上河意以誨之幸全署若其原住上法新可即也
皆須發福島御引曰高軍法詳義而丁次一曰物也其大甲中先手
命亦人二宗理休亦人別世甲氏之臣三亦信也野之是秋每武田大
可也一傳由是甲的告一氏用中事原上河意以誨之幸全署若其原住上法新可即也
以在事法一之秋一之詳者義一之臣三亦信也野之是秋每武田大
改一亦事也若信也一之臣三亦信也野之是秋每武田大
其原住上法新可即也

大村白一呼事平有河意以誨之幸全署若其原住上法新可即也
由是甲的告一氏用中事原上河意以誨之幸全署若其原住上法新可即也
皆須發福島御引曰高軍法詳義而丁次一曰物也其大甲中先手
命亦人二宗理休亦人別世甲氏之臣三亦信也野之是秋每武田大
可也一傳由是甲的告一氏用中事原上河意以誨之幸全署若其原住上法新可即也
以在事法一之秋一之詳者義一之臣三亦信也野之是秋每武田大
改一亦事也若信也一之臣三亦信也野之是秋每武田大
其原住上法新可即也

大村白一呼事平有河意以誨之幸全署若其原住上法新可即也
由是甲的告一氏用中事原上河意以誨之幸全署若其原住上法新可即也
皆須發福島御引曰高軍法詳義而丁次一曰物也其大甲中先手
命亦人二宗理休亦人別世甲氏之臣三亦信也野之是秋每武田大
可也一傳由是甲的告一氏用中事原上河意以誨之幸全署若其原住上法新可即也
以在事法一之秋一之詳者義一之臣三亦信也野之是秋每武田大
改一亦事也若信也一之臣三亦信也野之是秋每武田大
其原住上法新可即也

大村白一呼事平有河意以誨之幸全署若其原住上法新可即也
由是甲的告一氏用中事原上河意以誨之幸全署若其原住上法新可即也
皆須發福島御引曰高軍法詳義而丁次一曰物也其大甲中先手
命亦人二宗理休亦人別世甲氏之臣三亦信也野之是秋每武田大
可也一傳由是甲的告一氏用中事原上河意以誨之幸全署若其原住上法新可即也
以在事法一之秋一之詳者義一之臣三亦信也野之是秋每武田大
改一亦事也若信也一之臣三亦信也野之是秋每武田大
其原住上法新可即也

大村白一呼事平有河意以誨之幸全署若其原住上法新可即也
由是甲的告一氏用中事原上河意以誨之幸全署若其原住上法新可即也
皆須發福島御引曰高軍法詳義而丁次一曰物也其大甲中先手
命亦人二宗理休亦人別世甲氏之臣三亦信也野之是秋每武田大
可也一傳由是甲的告一氏用中事原上河意以誨之幸全署若其原住上法新可即也
以在事法一之秋一之詳者義一之臣三亦信也野之是秋每武田大
改一亦事也若信也一之臣三亦信也野之是秋每武田大
其原住上法新可即也

夫の如くは、
（一）の如くは、
（二）の如くは、
（三）の如くは、
（四）の如くは、
（五）の如くは、
（六）の如くは、
（七）の如くは、
（八）の如くは、
（九）の如くは、
（十）の如くは、
（十一）の如くは、
（十二）の如くは、
（十三）の如くは、
（十四）の如くは、
（十五）の如くは、
（十六）の如くは、
（十七）の如くは、
（十八）の如くは、
（十九）の如くは、
（二十）の如くは、
（二十一）の如くは、
（二十二）の如くは、
（二十三）の如くは、
（二十四）の如くは、
（二十五）の如くは、
（二十六）の如くは、
（二十七）の如くは、
（二十八）の如くは、
（二十九）の如くは、
（三十）の如くは、
（三十一）の如くは、
（三十二）の如くは、
（三十三）の如くは、
（三十四）の如くは、
（三十五）の如くは、
（三十六）の如くは、
（三十七）の如くは、
（三十八）の如くは、
（三十九）の如くは、
（四十）の如くは、
（四十一）の如くは、
（四十二）の如くは、
（四十三）の如くは、
（四十四）の如くは、
（四十五）の如くは、
（四十六）の如くは、
（四十七）の如くは、
（四十八）の如くは、
（四十九）の如くは、
（五十）の如くは、
（五十一）の如くは、
（五十二）の如くは、
（五十三）の如くは、
（五十四）の如くは、
（五十五）の如くは、
（五十六）の如くは、
（五十七）の如くは、
（五十八）の如くは、
（五十九）の如くは、
（六十）の如くは、
（六十一）の如くは、
（六十二）の如くは、
（六十三）の如くは、
（六十四）の如くは、
（六十五）の如くは、
（六十六）の如くは、
（六十七）の如くは、
（六十八）の如くは、
（六十九）の如くは、
（七十）の如くは、
（七十一）の如くは、
（七十二）の如くは、
（七十三）の如くは、
（七十四）の如くは、
（七十五）の如くは、
（七十六）の如くは、
（七十七）の如くは、
（七十八）の如くは、
（七十九）の如くは、
（八十）の如くは、
（八十一）の如くは、
（八十二）の如くは、
（八十三）の如くは、
（八十四）の如くは、
（八十五）の如くは、
（八十六）の如くは、
（八十七）の如くは、
（八十八）の如くは、
（八十九）の如くは、
（九十）の如くは、
（九十一）の如くは、
（九十二）の如くは、
（九十三）の如くは、
（九十四）の如くは、
（九十五）の如くは、
（九十六）の如くは、
（九十七）の如くは、
（九十八）の如くは、
（九十九）の如くは、
（百）の如くは、

夫の如くは

（一）の如くは

（二）の如くは

（三）の如くは

（四）の如くは

ガラス使用

此の記述は、中世の武士階級に関するものである。文中には、武士の身分の継承や、土地の所有権について詳しく述べられている。また、武士の忠義や、領主との関係についても触れられている。この文書は、中世日本の武士社会の構造や価値観を研究する上で貴重な資料であると考えられる。

此の記述は、中世の武士階級に関するものである。文中には、武士の身分の継承や、土地の所有権について詳しく述べられている。また、武士の忠義や、領主との関係についても触れられている。この文書は、中世日本の武士社会の構造や価値観を研究する上で貴重な資料であると考えられる。



此の世の事ありて傳へたるは此の世の事ありて
有りたる事ありて傳へたるは此の世の事ありて
此の世の事ありて傳へたるは此の世の事ありて
此の世の事ありて傳へたるは此の世の事ありて
此の世の事ありて傳へたるは此の世の事ありて
此の世の事ありて傳へたるは此の世の事ありて

此の世の事ありて傳へたるは此の世の事ありて
此の世の事ありて傳へたるは此の世の事ありて
此の世の事ありて傳へたるは此の世の事ありて
此の世の事ありて傳へたるは此の世の事ありて
此の世の事ありて傳へたるは此の世の事ありて
此の世の事ありて傳へたるは此の世の事ありて

此の世の事ありて傳へたるは此の世の事ありて
此の世の事ありて傳へたるは此の世の事ありて
此の世の事ありて傳へたるは此の世の事ありて
此の世の事ありて傳へたるは此の世の事ありて
此の世の事ありて傳へたるは此の世の事ありて
此の世の事ありて傳へたるは此の世の事ありて

此の世の事ありて傳へたるは此の世の事ありて
此の世の事ありて傳へたるは此の世の事ありて
此の世の事ありて傳へたるは此の世の事ありて
此の世の事ありて傳へたるは此の世の事ありて
此の世の事ありて傳へたるは此の世の事ありて
此の世の事ありて傳へたるは此の世の事ありて
此の世の事ありて傳へたるは此の世の事ありて
此の世の事ありて傳へたるは此の世の事ありて
此の世の事ありて傳へたるは此の世の事ありて
此の世の事ありて傳へたるは此の世の事ありて



松平氏系図

一
二
三
四

久 久

本

計

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

本

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

忠臣

忠臣

忠臣

忠臣

忠臣

忠臣

忠臣

忠臣

忠臣

忠臣

忠臣

忠臣

平姓

佐久間 本國行 佐右衛門

桓武天皇皇子為原親王

良文

村田五郎 鎌守相悦年

陸奥守

忠頼

村田忠頼

忠通

平太史

為通

三浦平太史

義他

三浦少

義明

三浦大介

義宗

杉本太史

義盛

和守太史

常盛

和守太史

朝盛

和守太史

通以

佐高平太史

為親

佐高太史

秋師

佐高太史

秋定

佐高太史

宗盛

佐高太史

為盛

佐高太史

朝盛

佐高太史

常盛

佐高太史

為明 佐高與存
宗朝 佐高與存
朝明 佐高與存
朝次 佐高與存

高 佐高與存
宣道 佐高與存
尾山正所城王

高 佐高與存
尾山正所城王

高 佐高與存
尾山正所城王

高 佐高與存
尾山正所城王

朝信 佐高善九郎
尾山正所城王
信盛 佐高與存
信勝 佐高與存

盛次 佐高與存
盛改 佐高與存
女改 佐高與存
晴改 佐高與存
晴之 佐高與存

政明 佐高與存
政盛 佐高與存
政勝 佐高與存

政朝 佐高與存
至三州加茂郡...
大河左沙進...
進是重方...
其後...
尾山正所城王...
八...
御...
御...



於上總州津金領高橋而賜以十七石計為朱金七十騎元
文祿元年之辰朝拜征伐之時至肥前川右左在津唐長五年子開原後
供奉同十九年甲寅為大將後為本多上野介但保奉居身全
元和元年乙卯九月廿一死年七十九

佐久間兵九郎 兵九郎

政能

母鏡木内藏助重信女

事 榊原甚良乃道通女

元和元年甲寅生之州
元和元年乙卯大將征伐為兵出津同十年十二月他父遺跡上總唐長十七石
同二十一年在伊賀者以領千石也元乃廣差時唐長也元乃他物也
三百石寬永九年甲寅以滿整賜所遺物也相全同十七年唐長告老辭
正信三年甲寅 无

政元

仍名間兵藏

任在多少新方純元祀年長池人

母岡

女子

母岡權助
鏡木甚良乃重良身

正信

仍名間甚良乃

母榊原甚良乃道通女

寬永十七年甲寅生於家無名石乃百石領部于伊他與方同十九年
江州吉成在番同廿一年甲寅領部為女子居但元
正信二年乙卯唐長甲寅年以系初我領力
寬文六年甲午八月一死

藤原
佐藤 清成 信子

藤原冠領上は田原藤原氏御男

千常 切字

文徳

文行

文光

文清

中常

佐藤氏内侍藤原

高

佐藤和守

佐藤和守

高

佐藤

佐藤氏其信玄常名江氏名是清成
氏主跡也山内氏系也
甲府佐藤氏其地也

人常史高

信成

多事之國治湖人止

百三十三

信長

信長の子

信長

信長

信長の子

信長の子

信長

信長

信長の子

信長の子

信長

信長の子

信長の子

信長

信長

信長

信長の子

信長

信長の子

信長

信長の子

○

全書

○ 武家諸姓分脈系図

○ 武家諸姓分脈系図

全書

○ 武家諸姓分脈系図

全書

○ 武家諸姓分脈系図

○ 武家諸姓分脈系図

全書

○ 武家諸姓分脈系図

○ 武家諸姓分脈系図

全書

武家諸姓分脈系図

武家諸姓分脈系図

河津
子

河津

河津伊見九郎
河津高高
河津三郎

河津右京

河津次郎掃部助
河津寛
河津三郎

河津三郎
河津民部正
河津十郎支那

河津九郎
河津治郎

河津氏祖應三年為高師泰少將取而有室功後和州松岡生於其八



種家

河津掃部卿

瑞前月野取元注名種家

皇宗

河津伊豆守

河津八命正子

氏明

後改河津左衛門
信陽四條時宗坊子等阿

房信

河津又次郎伊豆守

信孝

河津勘解由

光種

河津伊豆守三郎掃部助

房祐

根川室津初代死

光業

河津式部

光業

河津右京

高知

河津式部少

弘業

河津以印三郎

伊豆守

伯耆守

在宗

弘業
信大内義典電童十六入永正八年未仕四洛陽
舟思出有功賜西御香町任伊豆守

貞光

河津與治郎

隆業

河津新四郎掃部助伊豆守

綱家

河津平八

我後守

仕大内義隆初冠有敦軍功

隆光

河津掃部卿

隆祐

河津勘解由

光敏

光良

河津三郎

隆家

河津

中子

杉手高門

善

仕宗像大造云許

景徹

為日本朝廷通文秀吉遣野馬大内萬曆皇帝
贈賜日本光禪師及金襴袈裟

河津二郎新之丞

晴喜氣二郎

氏隆

仕加藤肥後守

与宗祐

河津半左衛門 与中右五郎仕真田路前守長

貞安

女子 交 嫁若像吉田貞次

吉田彦左衛門長重

貞子

女子 嫁高倉明神守

祐道

吉田八左衛門長隆

祐子

河津太郎助 守左衛門

貞光

貞元

等智花邊坊

女子

左子 嫁博多所人

河津吉重

女子

吉田彦左衛門女子八左衛門

女子

吉田比治左衛門重貞

女子

河津又右衛門 万信正守子 丁三右衛門

女子

河津休信

女子

事有頼小左衛門長祐

女子

紅雲山御坊方主

女子

万信正守子 万信正守子

高野道入 高野道入 着子

子孫 高野 五左衛門祖

河津高重

祐義

祐長

祐信

祐信

祐信

祐信

祐信

祐信

祐信

女子 久子原善院

河津十郎左衛門

祐智

母有賴中乃正成
一壽 心善福多賴若清身才女子壽白院
得長子尚子英典通所

居野州宇都宮仕角年善作身得百子名有立身望退身
以有賴小乃正成之似身仕我前光通卿得二百名後加百名
凡三百名他在國中為大寺數任目付後為先武頭其後
御留守中惣持用建然海福市郎存以爭論御書在而
寛文元年才上同允相刺死新法年法善寺司覺誠院義天理

女子

河津休卷 壽

崇祐

河津權之助 善交

壽高野道入壽美河津休卷子

生野川

先通名再初名返

直弘

塩谷藤九郎 為塩谷又乃乃壽

女子

号缺長尾 才在法善 石川天即乃乃壽再轉千

板坂宗悦志

祐重

河津善大史

嘉祐

河津茂大文

道祐

孫十郎

祐繩

善交

祐順

佑交

社道

河津止若 五郎左衛門 子休庵

慶長年奉仕

專有賀小左衛門正成仰

台位公別髪為山奈道坊主寛永九年山御吉番

万治九年十六九年吉番末御

女子

河津吉次大士大丈 年比佐左衛門 幸自身母

社道

河津吉次大士大丈 仕加藤照信寺忠廣後孫人

祐俊

河津又印

休庵卷

貞以

河津新裁休庵

美田四野道入三善

万治三年十二七三路曾如江兼

美田四野道入三善 寛文十七年七八路

寛文十七年美田四野元

女子 河津善孝又三善 馬高野道入孝子

高野道入

馬高野道入

孝子

蓮賀 信力 金賀 律師 永賀 三河 律師

細賀 信力

仁賀 信力

紋田 信力

貞賀 比良田中坊 法印 傾江村志賀部比良左

文祿 甲午年 比良田中坊 法印 傾江村志賀部比良左

喜 貞氏 元和七年 比良田中坊 法印 傾江村志賀部比良左

圓賀法印 始之世

慶長 二年 丁酉 比良田中坊 法印 傾江村志賀部比良左

貞 貞氏 慶長 元年 比良田中坊 法印 傾江村志賀部比良左

貞 貞氏 慶長 元年 比良田中坊 法印 傾江村志賀部比良左

貞 貞氏 慶長 元年 比良田中坊 法印 傾江村志賀部比良左

貞 貞氏 慶長 元年 比良田中坊 法印 傾江村志賀部比良左

貞 貞氏 慶長 元年 比良田中坊 法印 傾江村志賀部比良左

貞 貞氏 慶長 元年 比良田中坊 法印 傾江村志賀部比良左

貞 貞氏 慶長 元年 比良田中坊 法印 傾江村志賀部比良左



下向と下七郎等下向と下向と下向と
之向の中下と下向と下向と下向と
下向と下向と下向と下向と

下向と下向と下向と下向と
下向と下向と下向と下向と
下向と下向と下向と下向と

下向と下向と下向と下向と
下向と下向と下向と下向と

下向と

下向と下向と

下向と

下向と下向と下向と下向と
下向と下向と下向と下向と
下向と下向と下向と下向と

下向と下向と下向と下向と
下向と下向と下向と下向と

下向と下向と下向と下向と

下向と下向と下向と下向と

下向と

下向と下向と下向と下向と
下向と下向と下向と下向と

下向と

下向と

下向と

下向と

下向と

一 小田原守一 小田原守一 小田原守一 小田原守一

一 小田原守一 小田原守一 小田原守一 小田原守一

一 小田原守一 小田原守一 小田原守一 小田原守一

一 小田原守一 小田原守一 小田原守一 小田原守一

一 小田原守一 小田原守一 小田原守一 小田原守一

一 小田原守一 小田原守一 小田原守一 小田原守一

一 小田原守一 小田原守一 小田原守一 小田原守一

野口氏

氏

氏

氏

任...
所...
千...
留...
任...

任...
千...
任...

任...
千...
任...

法成所...
此...
此...

此...
此...

法成所...
此...
此...

法成所...
此...
此...

法成所...
此...
此...

法成所...
此...
此...

寛文二年...
二百俵
元禄十年...
元禄十年...
元禄十年...

賞

恒岡新八郎

如

寛文二年...

元禄十年...
相...
元禄九年...
寛保二年...

元禄九年...
寛保二年...



恒回勘四郎

母

享保十一年乙子生甲子
寛保二年辛未八二海目二百俵為甲子生
天明四年乙酉廿九致仕

資一

恒回小市郎 藏人

生甲子

天明四年乙酉廿九致仕
久世和子傳之為甲子附加藤驗以子也

資

恒回金次郎

母



資直

恒同推之也

母

生少

寛文 年

新規烏大御番酒井伊十守經賜二百俵

天和二年壬戌九月十五日

葬松源寺

与覺源道徹居士

資継

恒同伊兵衛

母

天和二年壬戌十二月十六日二百俵烏少善請

元禄二年庚午正月九日

葬松源寺

号の外常機居士

資房

恒國源節

女

明曆二年申生口

寛文十二年子五十六部屋位為大御番酒井伊守終二百伍
延宝七年小宗六婚元方御細戸後許為小者詰
中振大陽寺住持元禄八年乙亥二十一路日五百名有面
御幸別墅阿部豊後守傳之同九年甲子六拜謝之献銀貳代
後烏金田園防寺子配言保六年壬午十九及年立十六并
松源寺子劍峰光之妻居士

噴剛

女

恒國源兵衛

生口

高保六年子五十二七跡目五百名有面而伊老中判至
水野和泉守傳之為中兼傳金田園防寺子配
同七年乙亥六十一繼日少程献銀貳代建部氏神不稱子配時
同十一年丙午正廿八為新修番
宝曆十年乙亥六十二及年

法良

木林川勘六郎

宝永四年為木川内藏進

養子

資福

女

恒國大内藏

生口

寛延元年乙辰二十七及年同寺
与曾山願法園居士

實

恒國

母

生江戸

宝曆十年春、跡目五百平石

為中書省

明和八年十月十二日没

再松源寺

淨觀是誰居士

恒國三五郎

源兵衛

惣算

母

生江戸

明和九年春

跡目五百平石馬中書省中書省人権上配

同年三十五為大御番依煩不出
寛政八年春六十五為大御番、出陣系近江守、信守、女、腕
討馬身傷、享和元年、百十九、為新御番、室賀、國量
組文化 年 告病、研、為、中書省
同十年、百七十六、致仕

恒國長藏

母

生江戸

文化十一年庚酉七月六日奉旨
五百五十九名 德世為初由主判甘樂郡三郎 武世兒玉郎
車十名外 傳步印地上判甘樂郡高田邑 龍上守
同官時員 同一官色 清和院
内十名

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

藤原姓

椿井

才四山城 紋 裏苗 榮塚

品正長

椿井喜右衛門 号梅菴
居京都

正次

椿井推之助
生城州

慶長十六年壬寅始考仕
台徳公賜年俸四百俵同十七年壬子附給 駿河大納言忠長
依甲州於進 忠長只加秩四百石元賜二百石



寛永元年甲子加賀石丸賜千二百石為御小姓領番頭
兼奥向田二年丙寅 忠長以素行馬布衣
同九年壬午 忠長以神預于稻葉丹後守時預常州
枅岡同十四年丁丑 御赦免出戸后土常内藤志摩守
別邸同十五年丙寅二及年五十三 奔小石川無量院
号春清院殿覺光素園居士

女子
甘南

于紀伊向

寛永七年壬午九月廿八及奔無量院
号高德院殿喜月知度大姉

正興

以待遺吉子内藤氏

内藤丹後守

寛永十一年甲戌生常州枅岡

正安

椿井喜之助

寛永十四年丁丑 神赦元賜五百石
寛文十年庚子二十七及年 奔無量院
号長元院殿智全良慶居士

正

椿井喜兵衛

序應三年甲子為御十世祖

寛文十年庚子七八跡自五百石為中管領改喜之助
秋田渡路守継時 元禄十六年壬子正其及年 奔無量院
号芳山院殿成者道居士

女子

元禄十六年壬子九月九及年同寺
号慈照院殿理菴清智大姉

政好 椿井敷馬 喜之助

生口

元禄十方年系三廿三跡目五百石苗向而御老中翌利元
但馬守傳之為中老清備口提津寺但同年八十二繼目傳
猷銀馬
延享元年子之升跡系 年無堂院
子正教院殿但興義福居士

安長 椿井藤之進

母深津 喜

宝永五年戊子七六生口
延享元年甲子 水跡目五喜
宝曆六年丙子五五跡年四十九 年無堂院
子正勇院殿但興義山居士
天明六年丙午九廿一政年八十二 年
同寺子正勇院殿量卷喜貞居士

某 椿井八三郎

花村 喜

延享四年丁卯四九天跡同寺
子映雲院寶地清光居士



安駕

椿井百助

茂子衛

實
實女

喜着又安長女

生江戸

宝曆六年甲子

同日五百石為中書侍

安永三年丁酉十七為御書院番太田駿河守組

寛政十年丙午四十二没年 寺田寺

于勝心院殿最譽洋子居士

子
母

篤

養女篤喜

政光

椿井泰五郎

喜之助

寛政十年

同日五百石

為中書侍

同日 為亮御書院番

文化 年

告病辞

政

椿井勇次郎

母



文化十一年丁丑七十九歳始馬十歳
五百石 無上高望 武九橋御印 四百石 同都筑御 世老

世膳子姓
執 本國 紋敷尾内之頭左也

正 執 除次右衛門
任 氏 伊 殿

正	氏 隼	執 除次右衛門	任 氏 伊 殿
	子 子	川井 道物 信典 身	
	實 鈴 木 八郎 為 忠 身		
	執 善 之 五		



享保 年為元御進習番賜二百俵後為御前
延享四年丁卯十月廿年 寺赤坂
与濱海院殿珠水同朝居士

正

賀

弥一郎

始傳以郎

妻本田清兵衛

女 享保七年子一七俵組

生

延享四年丁卯十二月

拜目二百俵為御前

寬延元年辰酉十月為元御進習番賜二百俵後為御前

安永五年甲辰四月廿年 寺同寺

与正出院殿德雲同朝居士

清和源氏

恒岡

本國相模

紅丸招殺

鎬矢

太田文院

恒岡彈正忠

長門守

主相模

屬北條氏綱氏康氏政

領武州稻毛高田邑 同河下平川五合 二十六女百八文

同葛西中丸 同寺込内富塚 五百文小島内養

字寺分文 板橋高本方共十三貫小 向内村坊者

元九十三貫二百廿十文

天正年 及



資政

恒同内記

生相也

属北條氏政同十郎白房五女正室實相知由名落城
故藝居文祿元年辰秀吉肥前名古原役從行拜謁
秀吉後拜
大神后慶長十五年辰丑十改

某

恒同義作
付此處直

資久

恒同源兵衛

新元衛門

生駿河

慶長十五年辰戌春任
大神后元和二年辰春任
台徳公為大神香賜三百五十五石皆川山城守也時
寬永十年至百二十七並加合賜五百石同廿年春為
所缺地土警奉行延宝七年未依老辭為少普請
貞享二年乙丑正月四改年
并才七倉龍山松源寺
号陽山了春居士

資勝

恒同佐大丈

生江戸

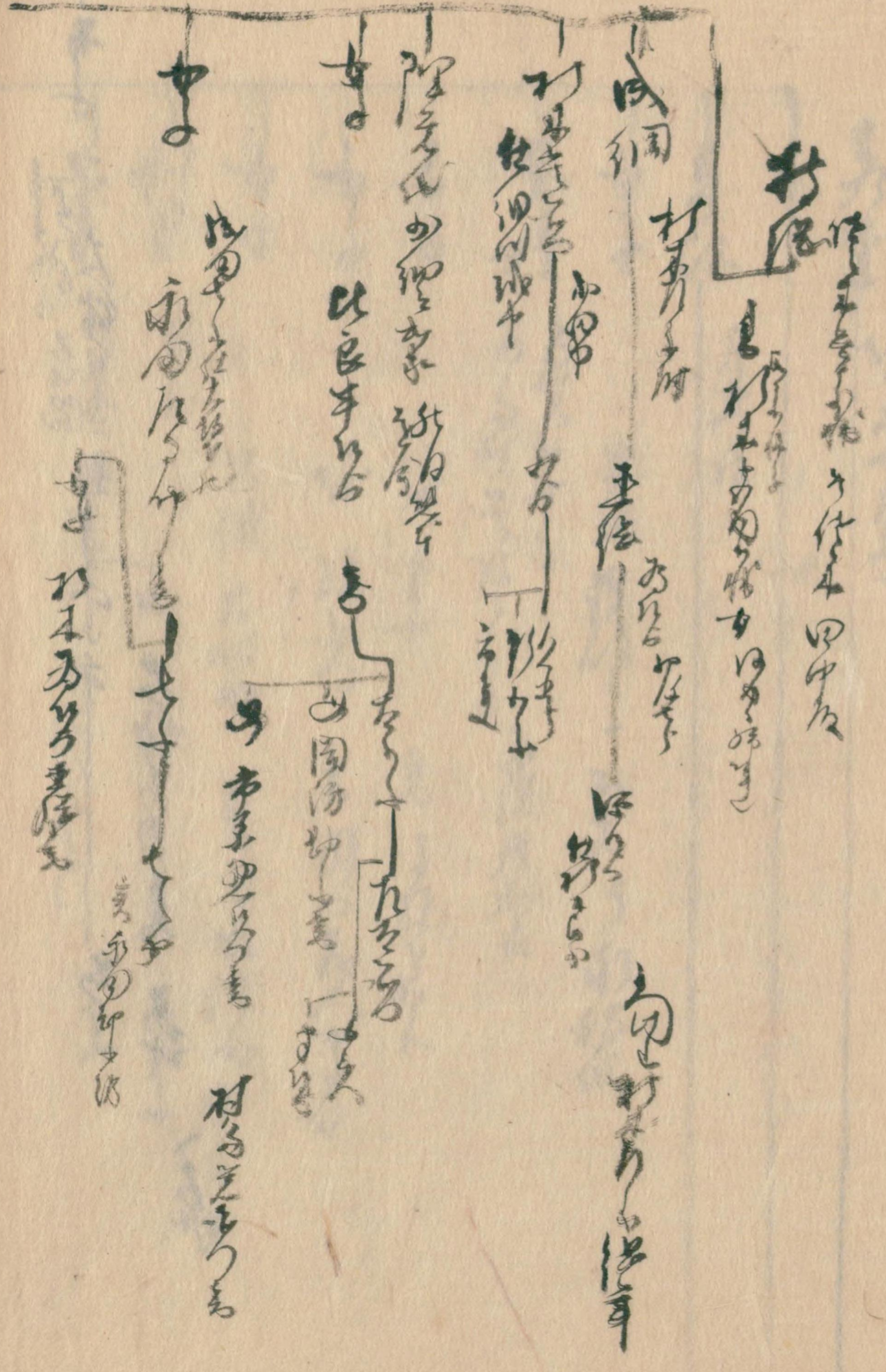
寛永十三年七月十一日一部屋任為大御番松平外記組
 賜二百俵慶安元年八月十六日替新田番原松平外記組
 後延享十一年武田與左内記時延宝七年未九ノ馬
 御能地土其變又跡後自寛子二年七月廿九日御目
 首向御老中列座大久保加賀守傳々
 元禄八年七月十七日致年 新井込松源寺
 于法公時禪隆居士

實儀

恒國金兵衛 勘四郎

母同

生口



為時 廣州士界名

某

正保二年十月十日 廣州士界名 仕水右出羽守仕備中松山為鷹後
無是之親兄弟也

廣州士界名

仕水右出羽守仕備中

某

廣州士界名

仕水右出羽守仕備中

元祿十年仕水

仕水右出羽守仕備中

廣州士界名

仕水右出羽守仕備中

廣州士界名

元祿十二年十月十日 廣州士界名 仕水右出羽守仕備中
正保二年十月十日 廣州士界名 仕水右出羽守仕備中
九鳥代官正保二年十月十日 廣州士界名 仕水右出羽守仕備中

廣州士界名

仕水右出羽守仕備中

廣州士界名

正保二年十月十日 廣州士界名 仕水右出羽守仕備中
同七年十月十日 廣州士界名 仕水右出羽守仕備中
改金信行州信言同年八月十日 廣州士界名 仕水右出羽守仕備中
同七年十月十日 廣州士界名 仕水右出羽守仕備中
代官次元文元年十月十日 廣州士界名 仕水右出羽守仕備中

忠 富八 平義

史

元文元年農十師武儀言劫是人是習同二年有後
同五年有甲二死方義山元卷作三年廿二

将 岑

九所 羊

史加度其終身

元文五年七師武儀言劫是習延子元年子八初加後
同二且五世習音加後寬延元辰四師加後同二實物方
同四月免我懸加後同三年子三結帳掛同年十二月代官加後
室下申四師加後同十月本後同八月西加掛加後同九年九月
免我掛加後同六月七先至先城實物方元辰具方宿割部
同七且正代官同八年有十晴午切稽故免代官元辰其書

同水加五師全但者會同同月待自同十月土自甲
山中子高身年方深同付二名會。明和元十代官是十條
同實五種同以武告元三師人掛同甲六年福後武儀
其高上同門同甲元同出二土和為天明七年二山景掛所
及中元後加後同甲子年元辰其和五師
史の史也掛九條有持内掛方元辰別衣掛本掛武方延
同衣加後元方了信同十甲官元年元辰其和五師

吉 平

明和元年三師元同甲子年元辰其和五師
同甲子年元辰其和五師元辰其和五師

将 福

平義 羊

史の史也掛十師武儀言劫是習人同九年三月信信信



藤原姓

執

書

敘教瓦内頭元巳

執

以

名

男

九州後之孫元巳二十九年清嘉院判法寺住持

品氏隆

生純判

執

降次右衛門

主計頭

仕純判家言宗后

止徳六年甲申五月廿二日供奉到

神奉九賜等如三夏名焉

有徳公御小姓

時保元

同

年七廿二叙諸大夫改主計頭同共也

拜謝之献銀長代享保三年丙戌九廿二夜年

与洞會院殿庭下本覺淨心居士

少和手

女子

實

鏡水

田

巳

川井

物信

與壽

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including the characters '藤原' and '純判'.



正周

執

陈一郎

左膳

貞
貞

生口

享保三年戊午十一五跡日菊園御老中列坐由山城産傳
為上書傳

同四年己未七月廿八日 元瓦御中性享保十三年土土御免

延享二年壬辰移 御才元後依病辞為守合

宝曆七年丁丑十二月十二日任

安永五年丁酉正月方及年七十奉回寺

号真正院殿重嚴英相居士

正壽

執

市之五

壹反寺

越前寺

安藝寺

母家子

毒

安永二年己丑五月及奉回寺
号自照院殿玉樹自揮入師

享保十四年己酉生口戶

寬延四年辛未二十九部屋任為

若君侍御伽宝曆五年乙未十月十七日為御小性元也

同七年丁丑十二月二十八日叙諸大史改壹反寺

同七年丁丑十二月二十八日叙諸大史改壹反寺

同七年丁丑十二月二十八日叙諸大史改壹反寺

同七年丁丑十二月二十八日叙諸大史改壹反寺

了組頭天明四年申辰七月廿六為場奉行改安親為子
寛政五年壬午五月廿二加役百石凡賜四百石
同七年乙卯十一月十九卒年五十五身同寺
与寛量院殿海印照信居士

女子 川井監物 久局壽

女子 板橋 蓮種壽 文化六年己三二死 弟
淳寺号 華好院殿 忌 无 廣

正房 市之五 陸二少門

生少戸

寛政七年乙卯 海月四百石
為御書院番 伴 辨 守 儀
文化五年乙辰 政

正 觀 善十郎

實田姓

生少戸

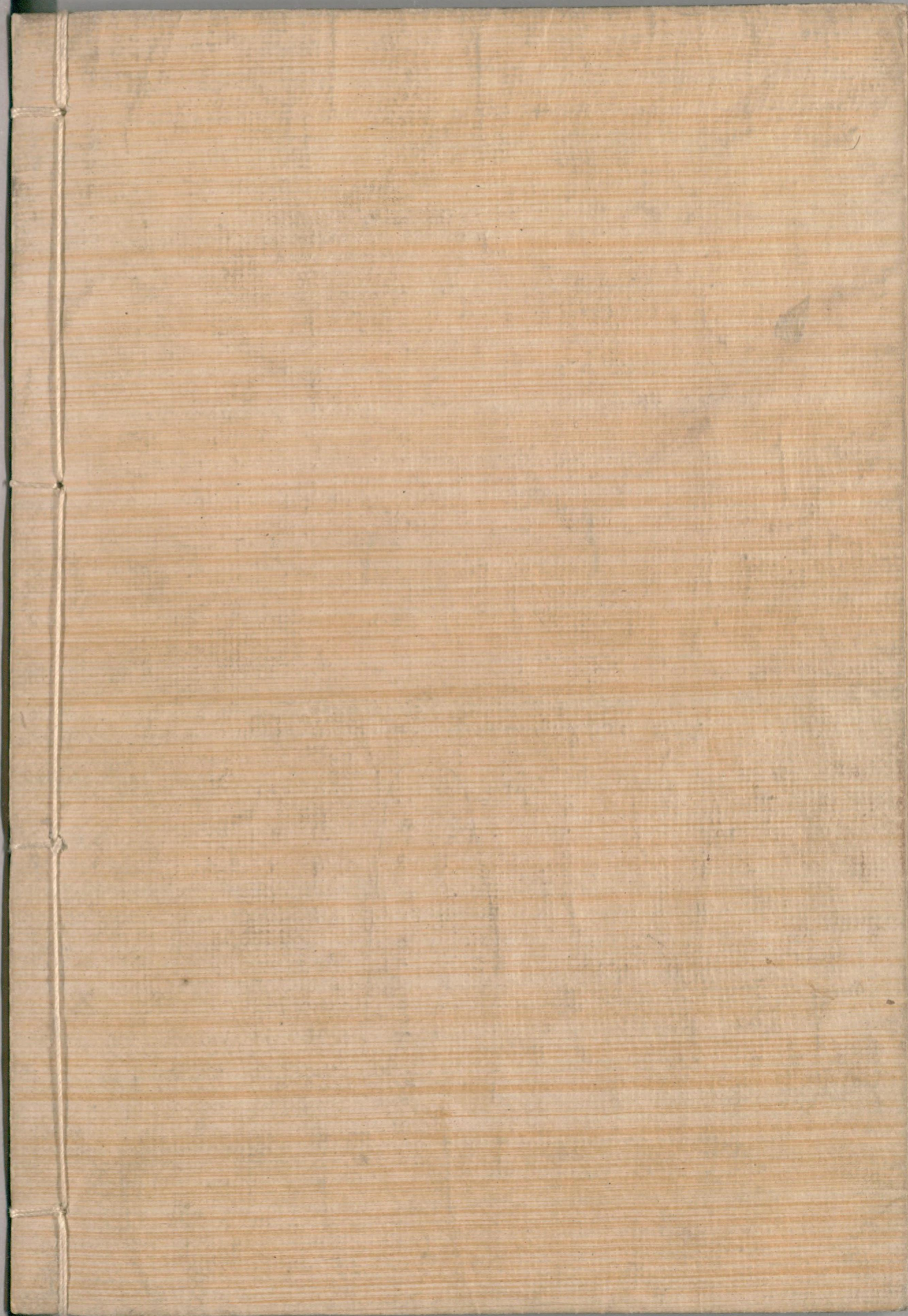
文化五年乙辰十二月廿五 善子 海月 為 十 壽
高四百石 外百三十石 實 比 高 武 判 比 在 郎 三 邑



838
297
116

Handwritten Japanese text, likely a genealogical record or family tree, written in a cursive style. The text is arranged in vertical columns and includes names and dates, such as "天明" (Tenmei) and "天明四年" (Tenmei 4th year). The writing is somewhat faded and difficult to read in some places.





国立国会図書館 タイトル『本朝武家諸姓分脈系図』 請求記号 838-116

ガラス使用